

宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第76集

広野遺跡発掘調査報告書

(広野町東裏 129 番地 1 他)

2010

宇治市教育委員会

広野遺跡発掘調査報告書

(広野町東裏 129 番地 1 他)

2010

宇治市教育委員会



広野遺跡調査地全景（西より）



竪穴住居跡 SH48 (東より)



竪穴住居跡 SH48 出土遺物

序

宇治市の南西部にあたる広野町は、千数百年以上もの昔、人々の生活したムラ、広野遺跡があり、庵寺山古墳や金比羅山古墳などの古代豪族の奥津城が造られた豊かな歴史があります。

今回、発掘調査をおこないました広野遺跡は、古代における広野の中心的な集落で、そのなかには豪族の住んだ館跡や、豪族が建立した広野廃寺が含まれています。また、広野廃寺の下層からは、寺が造られる前の竪穴住居跡も見つかり、寺院造営にあたっては住宅移転が行われた事を推測させました。

今回の発掘では、この広野廃寺の造営により移転した人々の移転先ではないかと考えられる住居跡を発見し、当時の様子を具体的に推測できるようになりました。今後は、この成果を郷土学習等へ積極的に活用してゆきたいと思います。

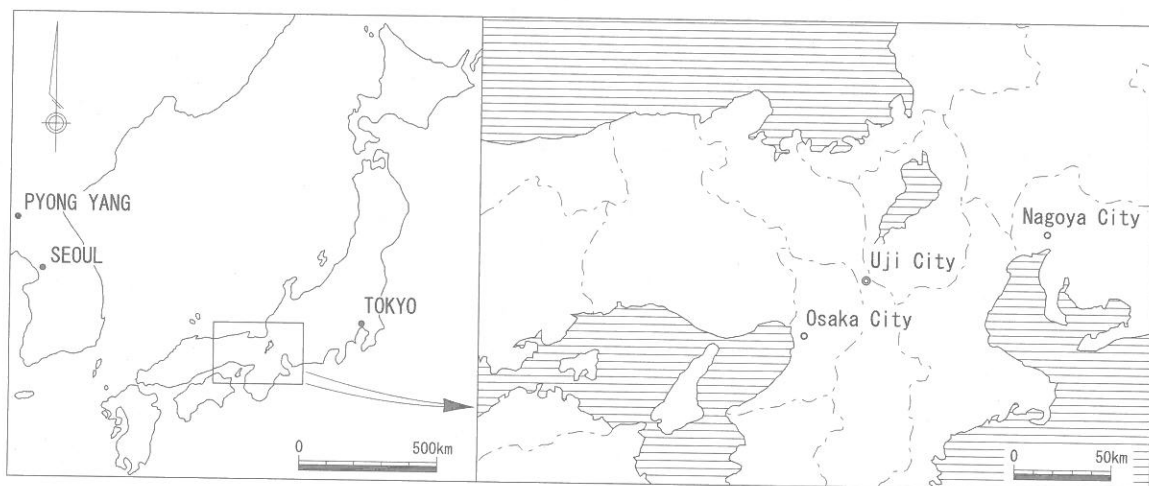
末筆になりましたが、本発掘調査の実施や報告書の作成にあたって、ご協力をいただいた関係各位に心より謝意を表します。

平成22年3月

宇治市教育委員会
教育長 石田 肇

例 言

1. 本書は、宇治市教育委員会が広野町東裏 129 番地 1 他で平成 21 年 3 月 23 日から 4 月 23 日まで実施した広野遺跡発掘調査報告書(宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書第 76 集)である。
2. 本書で使用する座標は、I T R F (国際地球基準座標系)に準拠した世界測地系国土座標第 VI 系を用い、地図中で方位記号の指し示す方角は、座標北である。また、高さの基準面には、東京湾平均海面(T.P.)を用いた。
3. 本書の土層色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・日本色彩研究所色標監修)第 24 版(2002 年度)に従った。
4. 本書の遺構名称表記は、SB(建物)、SH(住居)、SD(溝)、SK(土坑)、P(ピット)を用いた。
5. 本書では、既往調査地の位置等について宇治市教育委員会編『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第 17 集(1991)、48 集(2000)を参考とした。
6. 本書収録遺物の実測・製図は、大下あかり、山本綾子、横田真吾がおこなった。
7. 本書収録の遺物写真は、寿福写房(代表 寿福 滋)に委託した。
8. 本書の編集と執筆は、宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係が担当し、実務を横田真吾がおこなった。



宇治市の位置

本文目次

I. はじめに

1	報告の目的	1
2	調査の原因	2
3	調査の体制	3
3	調査の経過	3

II. 地理的・歴史的環境

1	広野遺跡の地理的環境	4
2	広野地区の歴史的環境	4

III. 調査の成果

1	基本層序	6
2	検出遺構	7
3	出土遺物	9

IV. まとめ

1	遺構の変遷	10
2	集落の移動	11

挿図目次

第1図	調査地位置図	1
第2図	調査地拡大図	2
第3図	調査区配置図	3
第4図	宇治市と周辺の主要遺跡	5
第5図	東壁土層断面図	6
第6図	竪穴住居跡SH48平面・断面図	7
第7図	掘立柱建物跡SB94平面・断面図	8
第8図	柱穴平面・断面図	9
第9図	遺物実測図	10
第10図	遺構の変遷	11
第11図	集落の移動	12

図面図版目次

PL.1	遺構全体図
PL.2	土層断面図

写真図版目次

PL.3	遺構完掘状況
PL.4	竪穴住居跡SH48
PL.5	竪穴住居跡SH48遺物出土状況
PL.6	掘立柱建物跡SB94と自然流路跡SD87
PL.7	柱穴断面
PL.8	東壁・西壁土層断面
PL.9	南壁土層断面
PL.10	調査前現地と作業風景
PL.11	作業風景と調査後現地
PL.12	出土遺物

I. はじめに

1 報告の目的

本報告は、広野町東裏で計画された名木川の改修工事に先立ち、宇治市教育委員会が実施した発掘調査の内容と成果を報告するものである。



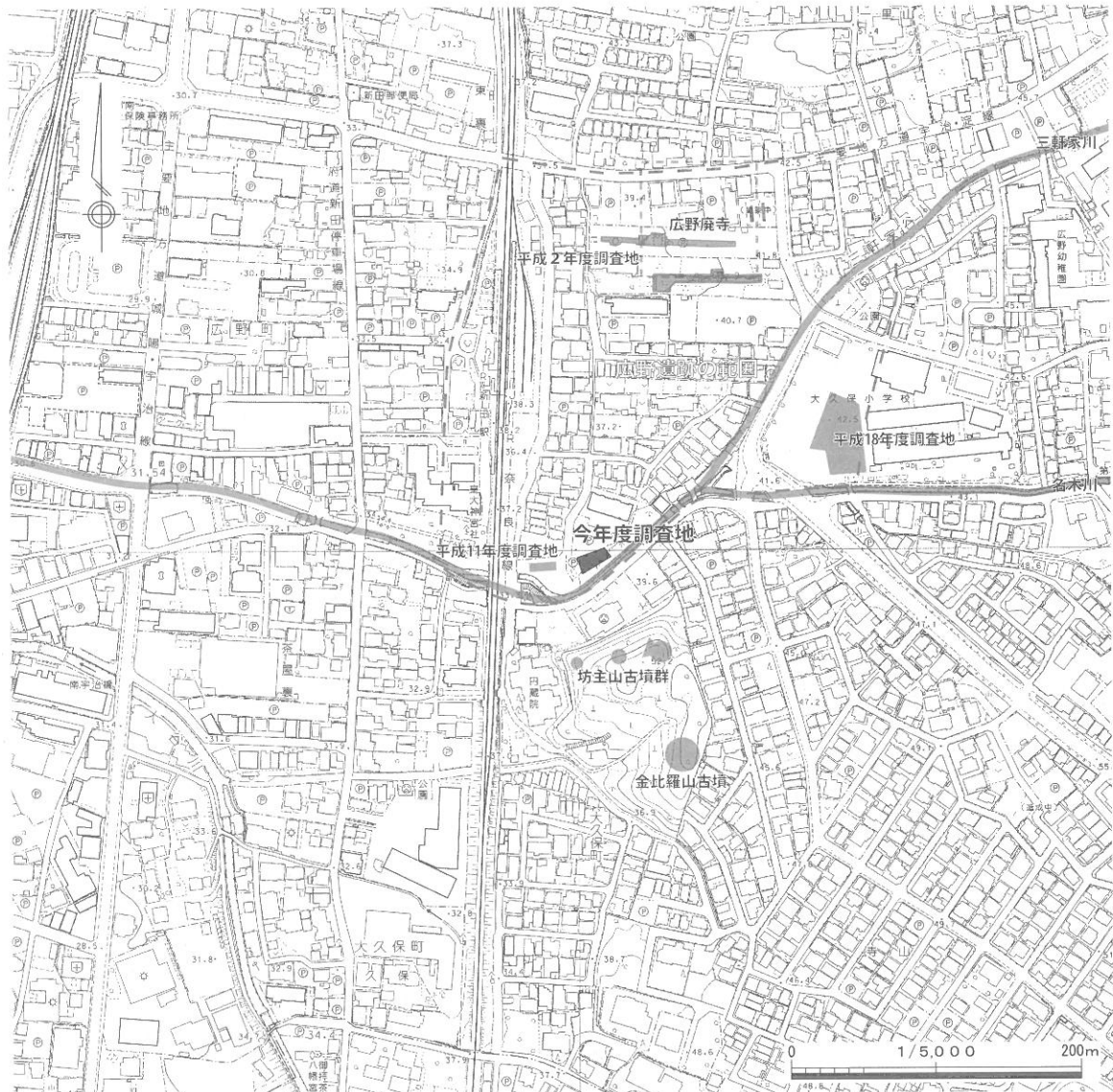
作図にあたっては、大正11年測量、昭和54年第2回改測、平成3年修正測量の国土地理院「宇治」（1/25000）を改変して用いた

第1図 調査地位置図

1. はじめに

2 調査の原因

平成20年1月20日付で、宇治市長久保田勇より広野遺跡の範囲において、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、名木川の改修工事を行う旨の埋蔵文化財発掘の通知が提出された。その後、1月28日付で京都府教育委員会から発掘調査実施の通知を受け、平成20年度内は宇治市歴史資料館文化財保護係が、機構改革に伴って21年度からは宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係が調査を担当した。11年度に西隣でおこなった広野遺跡の調査では、海拔33mの地点で遺構が検出されたが、今回計画の名木川改修工事では、海拔33mより深く掘削する予定であり、工事によって地下の遺構が壊滅する恐れがあった。そのため、改修後の河川範囲に合わせて調査区を設定した。実際掘削を行う調査区以外に、改修範囲内の調査区西側を排土置き場、改修範囲外の調査区北側を作業用通路として確保した。



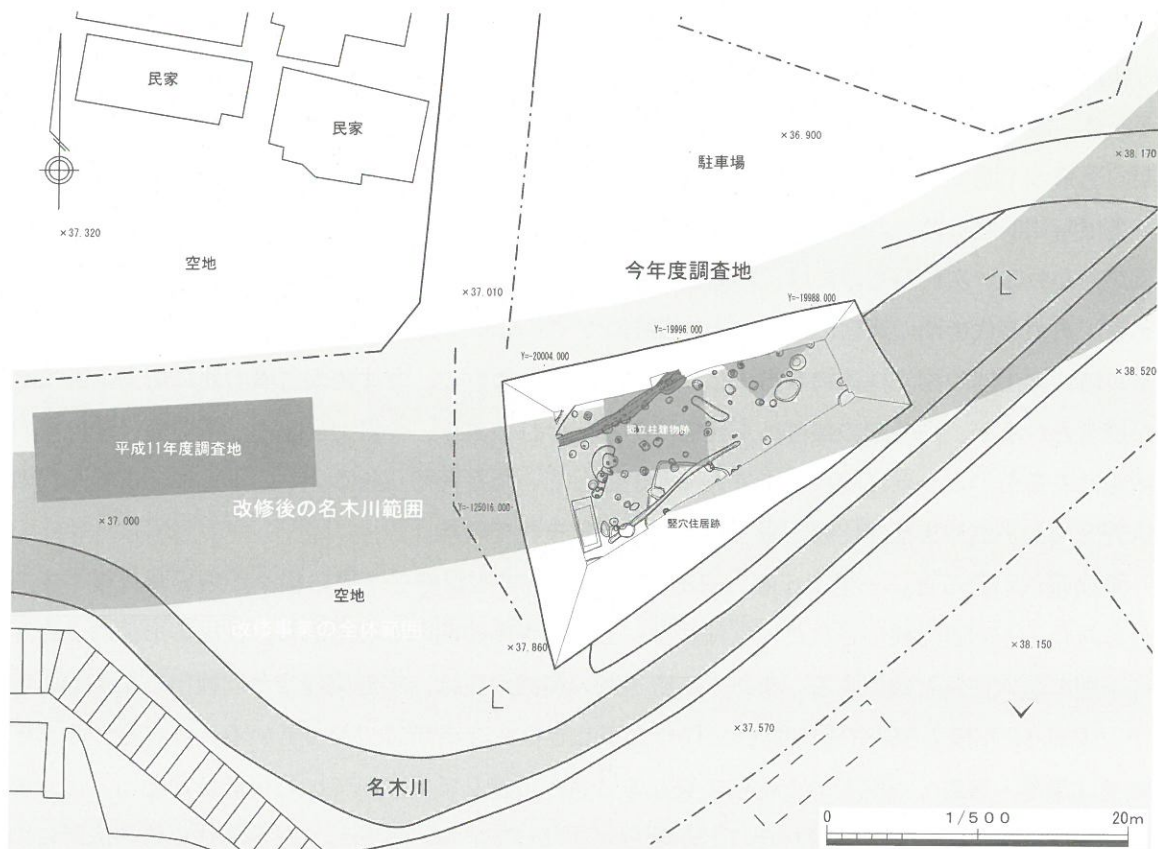
第2図 調査地拡大図

3 調査の体制

本発掘調査における主体者は宇治市教育委員会であり、責任者は石田肇教育長である。発掘調査事務局は、平成20年度までは宇治市歴史資料館、平成21年度からは宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課に置かれた。実際の発掘調査が始まった平成21年度からは、木下健太郎課長のもと、文化財保護係の杉本宏主幹、荒川史主査、永野宏樹調査員、横田真吾調査員が調査を担当した。現地では、横田が主に調査を担当した。発掘調査の掘削および測量作業は、NPO法人文化財支援センターに委託され、発掘技術員は河野凡洋、計測技術員は小林雅幸、作業員長は小原信利であった。

4 調査の経過

平成21年3月23日より調査区の設定と重機掘削を開始し、27日に上面の重機掘削が完了した。上面遺構検出作業は28日までおこない、31日に遺構掘削を終えた。同日中に完掘状況を撮影し、翌日重機で下面まで約30cm掘削した。下面遺構の検出を終えたのは4月2日であった。竪穴住居跡などが検出され、同日に検出状況の撮影をおこなった。下面遺構は8日に完掘し、翌日北西側の未掘部分を重機で掘削した。15日に記者発表をおこなった。下面の完掘状況写真は16日に撮影し、調査区の埋め戻しが完了した23日に現地から撤収した。



第3図 調査区配置図

II. 地理的・歴史的環境

1 広野遺跡の地理的環境

東の丘陵上から流れてきた三軒家川は、旧城南高校北側を通過したのち広野遺跡南方を流れ、大久保小学校南側で名木川と合流していた。それら三軒家川と名木川による開析谷の緩斜面に、広野遺跡は位置する。その基盤となる地山は、大阪層群の城陽礫層である。平成2年度の調査で竪穴住居跡が検出されたのは、ほぼ平坦な地山上であり、居住に適した場所を選んで集落が営まれたと考えられる。また、広野遺跡北側には一里山丘陵の尾根が西方の大久保方面へと伸びる。

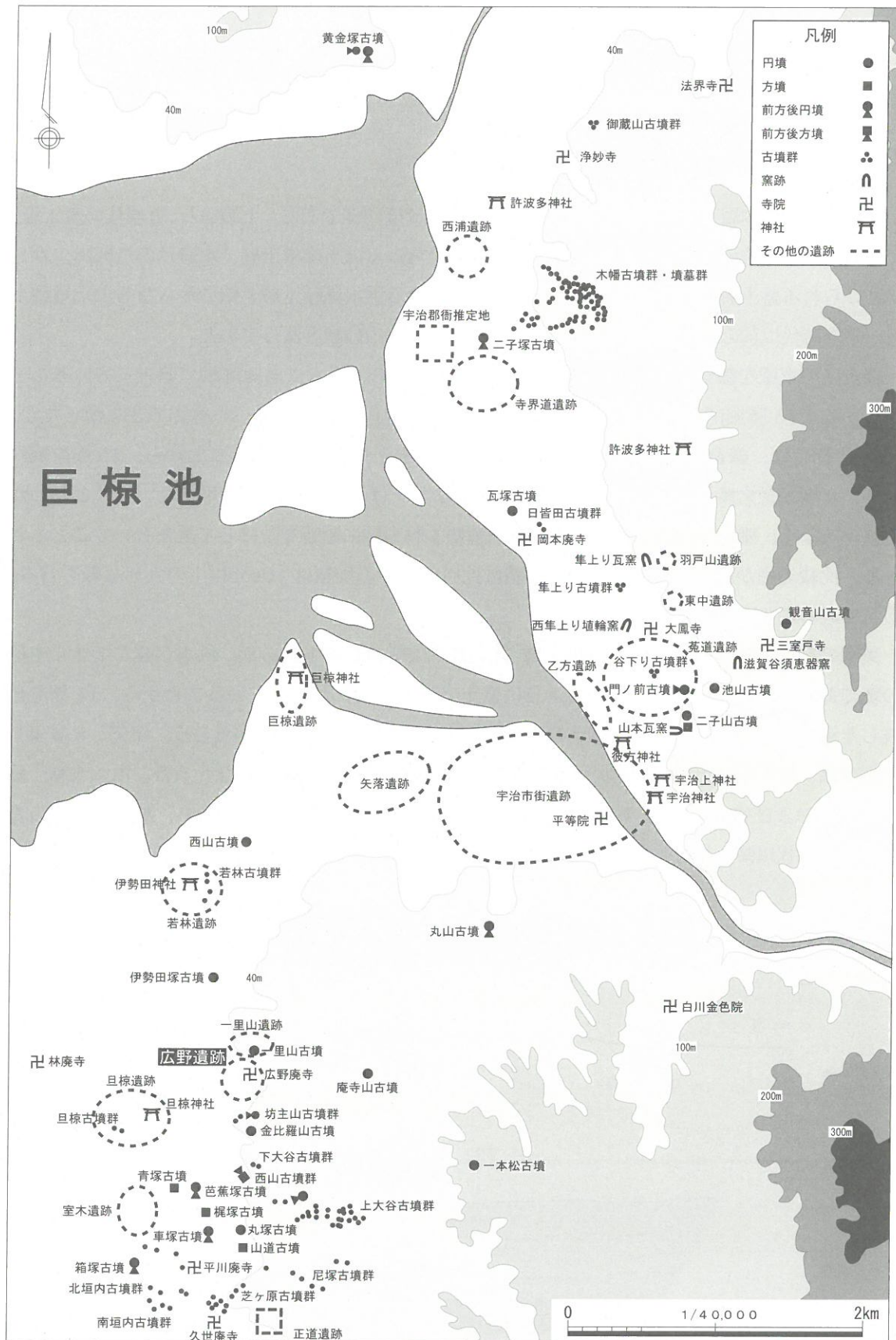
2 広野地区の歴史的環境

広野地区は、江戸時代に淀城城主永井尚政によって開拓されて以来、広野新田と呼ばれてきた。その開発当初よりしばらくは、現在では西方の大久保に含まれる領域として認識されていたようである。また、広野の周辺は、古来「栗隈山」や「栗前野」と呼ばれたことが『日本後紀』、『日本紀略』の記述から知られる。それらの文献史料には、桓武・嵯峨・朱雀天皇が栗隈野へ狩猟に訪れた記事があり、古代において広野は遊猟の地であったことがわかる。

奈良時代以前の広野について、文献史料による記載は無いものの、発掘された考古資料が当時の状況を教えてくれる。古いところでは、平成19年度に広野廃寺より出土した縄文時代の石棒があり、広野遺跡北方の一里山遺跡では、弥生時代の遺物が採集されている。しかし、双方同時期の遺構は不明であり、広野における生活の痕跡は、古墳時代より顕著となる。

古墳時代前期には、八軒屋谷遺跡で集落が想定されるほか、鏡や玉、鉄器を出土した一本松古墳が築かれる。次代のものには、円筒埴輪や多くの形象埴輪をもつ庵寺山古墳や金比羅山古墳がある。古墳時代中期の遺構には、一里山遺跡にカマドを伴う竪穴式住居が存在し、そのほか飛鳥・奈良時代の土器や掘立柱建物も出土している。後期になると、金比羅山古墳の北に坊主山古墳群が造営されるが、同時期の集落は未発見である。それらより、一里山丘陵の一带では、幾度かの断絶はあるものの、奈良時代頃まで人々が生活していたと考えられる。このように、古墳時代の広野では、古墳や集落が比較的限られた範囲に営まれていた。

飛鳥時代になると、一里山丘陵の南裾、広野遺跡で広野廃寺下層の集落が飛鳥時代後半まで営まれた。本調査で検出された竪穴住居は、広野廃寺創建期のものであり、住居の形態は広野廃寺下層の竪穴住居と類似する。また、広野遺跡の範囲からは、広野廃寺や今回検出した集落のほか、平成18年度の調査で豪族居館に伴うと思いき巨大な溝が見ついている。これらから、広野では集落・居館・寺院という性格の異なる3者が近接して営まれていた可能性がある。広野廃寺や集落は奈良時代まで存続したことが明らかとなっている。しかし、平安時代以降の広野については、わずかに広野遺跡で中世の可能性のある掘立柱建物が検出されたのみで判然としない。



第4図 宇治市と周辺の主要遺跡

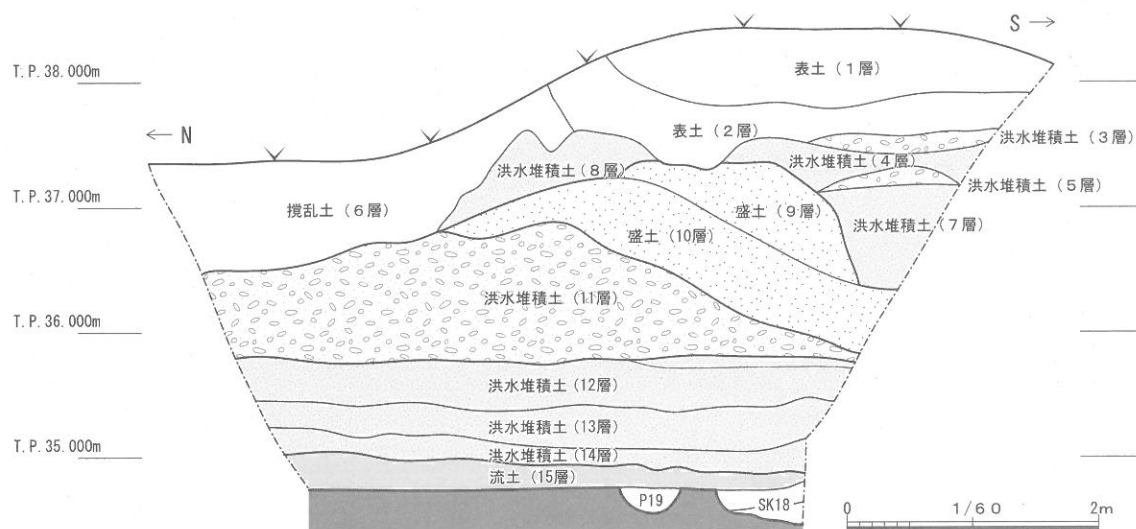
Ⅲ. 調査の成果

1 基本層位

本調査での基本層位は、西隣の平成11年度調査とほぼ同様である。上層より、近現代の表土層、交互に重なる細粒砂からなる洪水堆積土層と粗砂からなる洪水堆積土層、水避けのため嵩上げしたとみられる盛土層、再び交互に重なる細粒砂からなる洪水堆積土層と粗砂からなる洪水堆積土層、平安時代以前の遺物を含む流土層、礫を多く含む地山の順となっていた。

調査区の東壁を観察すると、流土層（15層）の上から、洪水による堆積が始まっていることがわかる。15層掘削時には、須恵器の杯蓋など平安時代以前の遺物しか確認できなかったが、15層上面では、鎌倉時代頃の瓦器碗や須恵器の甕が出土している。そのことから、15層を境にして、上層が鎌倉時代以降の堆積であり、15層より下は平安時代以前の堆積ということがわかるだけでなく、鎌倉時代頃から河流による堆積が本調査地に影響を及ぼしてきたということもわかる。比較的細かい砂礫を含む河流の堆積に比べ、粗砂の堆積は10cm以上の大きな礫も含み、流れの激しさを物語っている。

東壁の粗砂と礫からなる洪水堆積土層（11層）は厚さが約1mあり、洪水が運んできた土砂の塊である。この上に覆いかぶせるように盛土（9、10層）がされていることから、11層を形成した洪水が原因となって、水避けのために堤防状の盛土は始まったのだろう。実際、9層よりも上では、洪水堆積土層が分厚いという現象を土層断面からは看取出来なかった。洪水堆積土層（11層）および盛土層（9、10層）からは、共に遺物の出土が無かったため、洪水が始まったのは鎌倉時代以降とまでしか特定出来なかった。



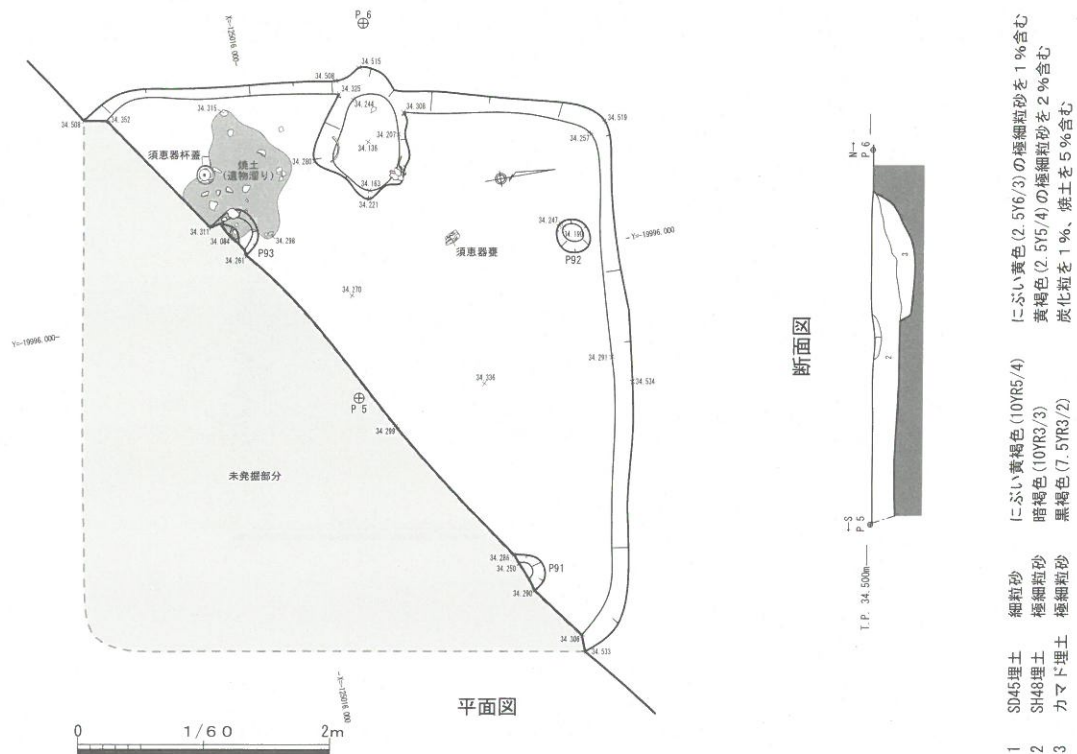
第5図 東壁土層断面図

2 検出遺構

15層の上面には明瞭な遺構が無かったため、ここでは下面の主要な遺構について述べる。

竪穴住居跡 SH48 隅丸長方形の竪穴住居跡である。主軸は、座標北より82度西偏する。一辺の長さ約4.2m、深さ約0.3mを測る。南側半分は調査区外であり、正確な規模は不明と言うほか無い。しかし、隅が3つ見えていることから、上記の数値で大過無いと思われる。北西の一辺中央には造りつけカマドがある。カマドからは、煮炊土器支え用の土壁は検出されなかったが、住居跡埋土からスサ混じりの被熱著しい土塊が出土しており、カマドの壁体であった可能性がある。カマドの南には、約0.8m四方の範囲に炭や灰のほか土師器が混じる赤褐色の焼土溜まりがあり、その最上部からは、完形の須恵器杯蓋が置かれたような状態で検出された。炭や灰、焼土などの内容物から、この焼土溜まりはカマドから掻き出されたものと判断できる。

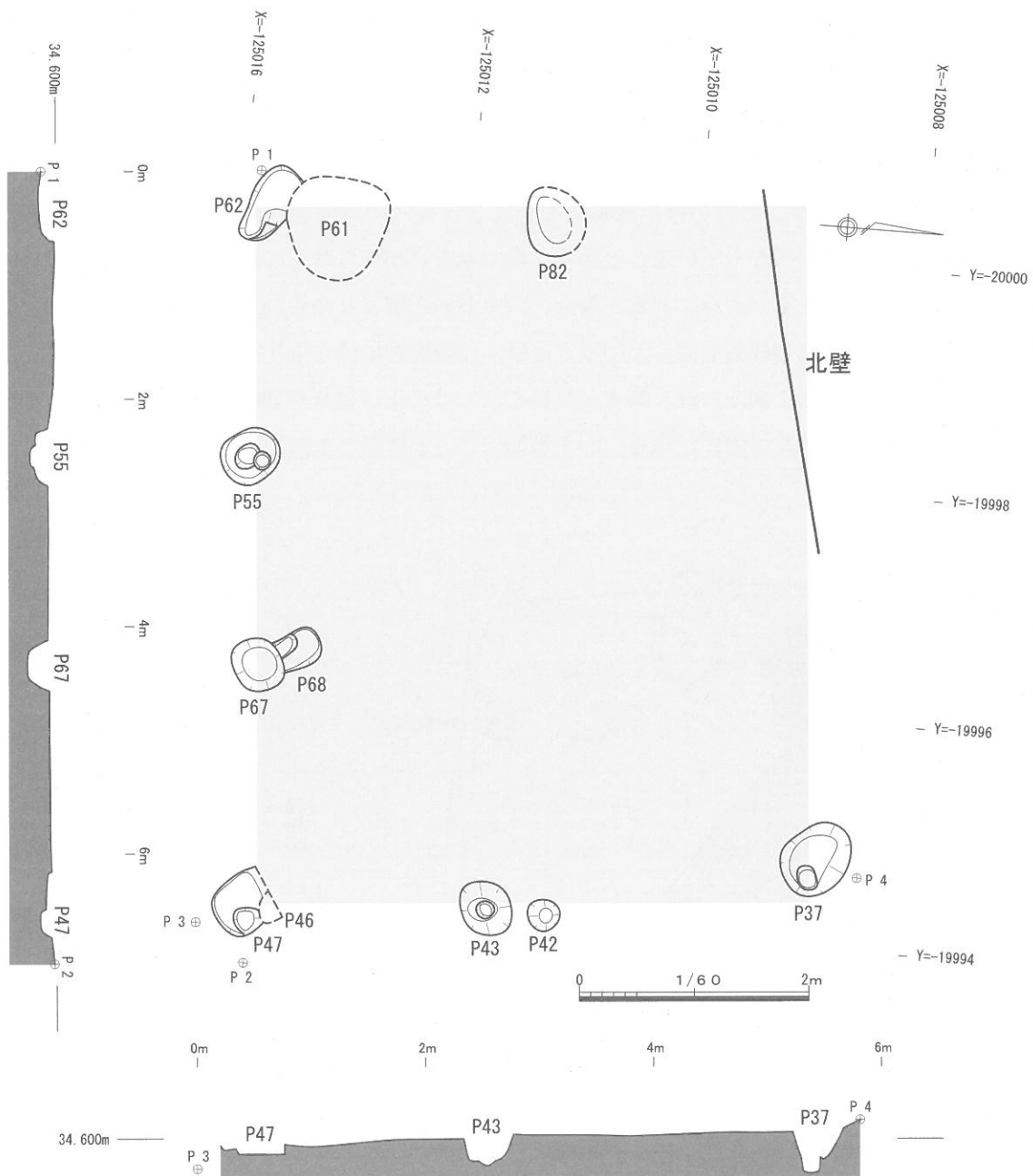
住居隅近くの床面では、P91、92、93をそれぞれ検出した。深さが5から10cmとそれぞれ浅いことは気になるが、これらは上屋構造を支える支柱穴の可能性が高い。支柱穴の内、P93の上には焼土溜まりが重なっていることから、焼土溜まりが作られたのは、住居廃絶の直前ないし直後と考えられる。そのように考えた場合、カマドの灰溜まりから焼土を掻き出すことや、焼土溜まりの上部に須恵器杯蓋を置くということは、住居廃絶に伴う儀礼的な行為の一環の可能性はある。住居の埋土は1層で、硬く締まっていたが、この上に掘立柱建物SB94を建てることを前提として、締められた可能性がある。出土遺物には、須恵器と土師器がある。



第6図 竪穴住居跡SH48平面・断面図

Ⅲ. 調査の成果

掘立柱建物跡 SB94 東西に長い長方形の掘立柱建物跡である。主軸は、座標北より 84.5 度東偏する。桁行 3 間、梁行 2 間で東西 6 m、南北 4.8 m を測る。柱間は短いもので 1.8 m、長いもので 2.2 m である。柱穴は、柱痕部分の直径が 0.1 から 0.2 m、掘方の直径が 0.5 から 0.7 m である。北西の柱穴は 2 基が調査区外で確認できなかった。また、自然流路 SD87 によって北の柱穴 1 基が削られている。東辺と南辺の柱穴は残りが良く、特に南辺の P62、P55、P67、P47 はすぐ北に補修ないし建替えのための柱穴が残る。竪穴住居 SH48 を埋め立てた場所に、P67 と P47 が入るため、SH48 よりも SB94 の方が新しいことは明らかである。



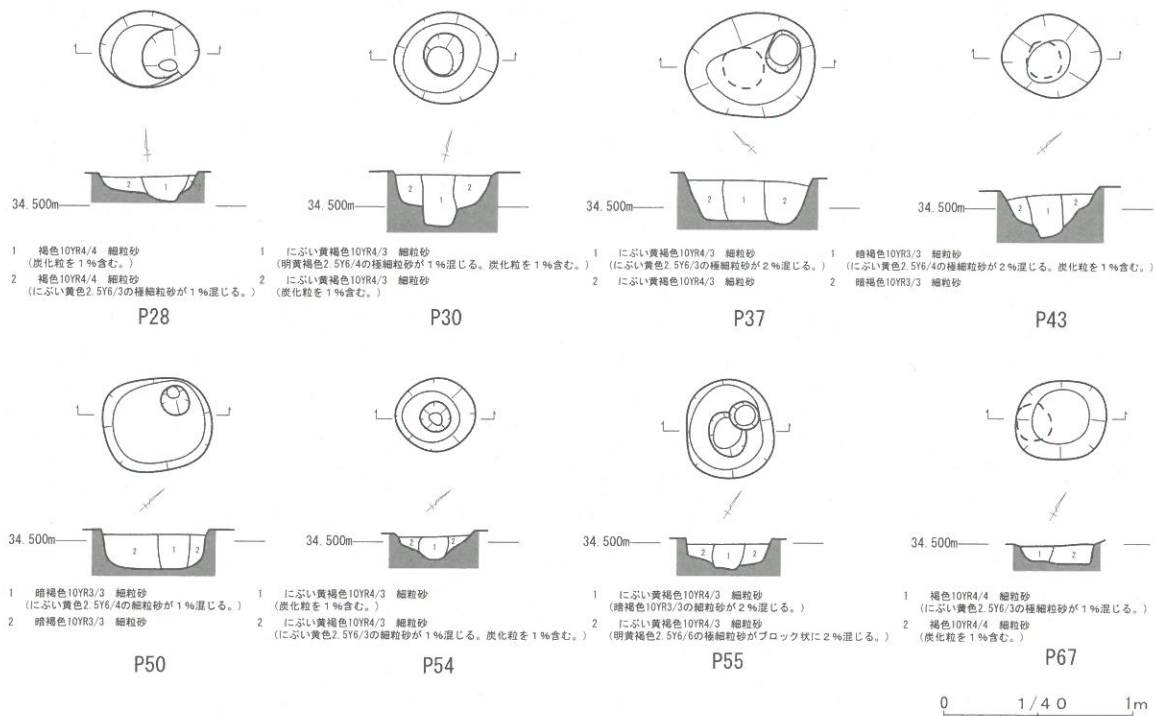
第 7 図 掘立柱建物跡 SB94 平面・断面図

自然流路跡 SD87 東から西へ流れる自然流路の跡である。幅 0.5 から 1 m、深さ 0.4 から 0.6 mを測る。底面は平坦であり、溝の断面形状はいびつな逆台形となっている。その幅が一定でないことや地形の傾斜に沿ってやや曲がっていることより、人工的なものでは無いと判断した。埋土中には、丸瓦や須恵器の破片などを含む。丸瓦については、上流側にある広野廃寺で使われた瓦に酷似することから、その廃絶後に流れてきたものと考えて良いだろう。そうした場合、広野廃寺の廃絶年代が奈良時代後半から末頃であり、鎌倉時代より下層の遺構面より SD87 が検出されたことから、この溝の年代は平安時代頃と判断できる。

土坑 SK18 調査区の南東隅に位置する土坑である。深さ 0.25 mを測る。大半が調査区外のため、全体の形状と規模は不明である。埋土に土師器片や炭などが混じることから、実際には土坑でなく竪穴住居跡の隅が見えているものの可能性が高い。

掘立柱建物跡 SB95 柱穴 P24、25、28、30 が確認できる。想定される柱穴の半分以上は調査区外にあるため、正確には不明であるが、掘立柱建物 SB94 の梁行と柱間に規模が類似することから、可能性として記しておく。

その他 上記の遺構の他に下面では、ピットや土坑、溝などが検出された。これらの多くは調査区の北側に偏在しており、南側に名木川があることから、調査区外の北側に集落の中心が考えられる。また、ピットには柱痕を持つものが存在することから、調査地には上述の掘立柱建物 SB94 と SB95 以外に、柱建ての施設があったと考えられる。しかし、柱痕および掘方からは、年代推定可能な遺物の出土が皆無であり、その時期について明らかにし難い。



第8図 柱穴平面・断面図

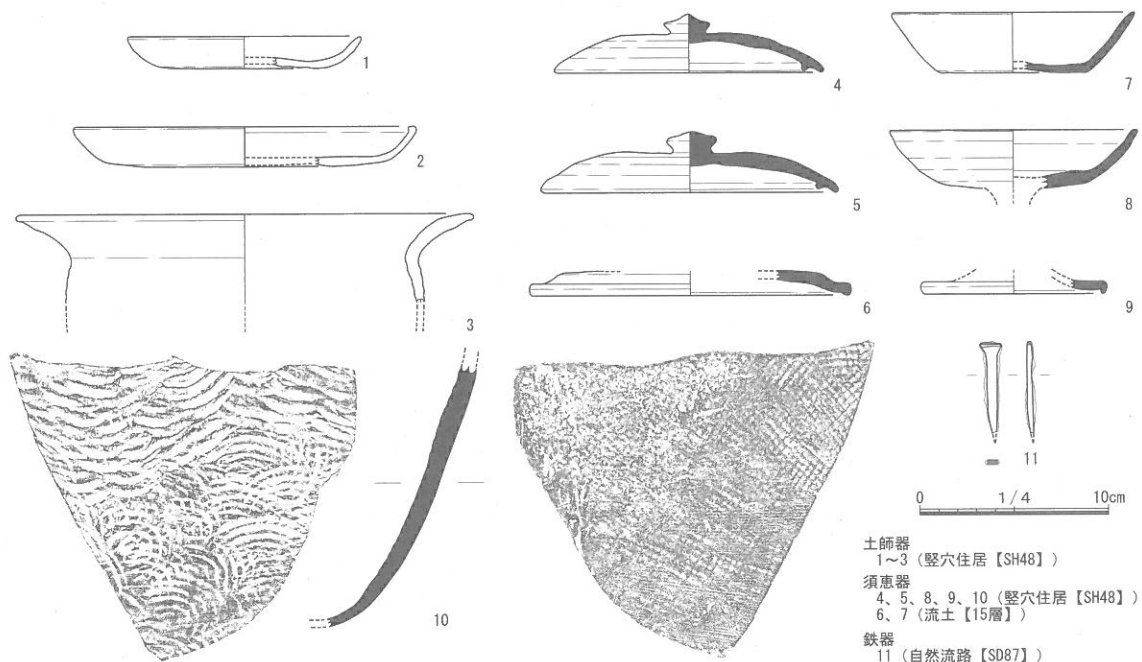
3 出土遺物

発掘調査で出土した遺物は、コンテナバット4箱分であった。ほとんどが図化に耐えない小片であったが、出土量としては土師器が最も多く、須恵器がそれに次ぐ。その他に瓦、瓦器、弥生土器、鉄器なども少数であるが出土した。

竪穴住居跡 SH48 土師器の坏、皿、長胴甕、鍋、須恵器の坏蓋、高坏、甕が出土した。坏（第7図-1）は復元径12.1cm、器高1.8cmを測る。内外面ともにナデ調整。皿（第7図-2）は復元径17.8cm、器高2.1cmを測る。口縁端部内面が肥厚する。坏と同様、内外面ともにナデ調整。長胴甕（第7図-3）は、復元径23.7cmを測る。口縁部はわずかに外反する。外面下部に薄くハケメが残る。坏蓋（第7図-4）は、口縁部径14cm、器高3.1cmを測る。頂部に宝珠つまみが付き、内面端部には坏受け用のかえりがある。内外面には回転ナデを、外面上部には回転ヘラケズリを施す。坏蓋（第7図-5）は、口縁部径15.6cm、器高3.2cmを測る。4と似るが、直径が大きいことや宝珠がやや扁平であることから、こちらの方が新相である。高坏（第7図-8、9）は、口縁復元径16.8cm、脚部復元径9.5cmを測る。内外面ともに回転ナデを施す。甕（第7図-10）は、底部付近の破片で、内面には同心円文、外面には格子ふう叩目文とカキメが残る。

流土（15層） 須恵器坏蓋（第7図-6）は、復元径16.8cm、残存高1.3cmを測る。内外面には回転ナデを、外面上部には回転ヘラケズリを施す。須恵器坏（第7図-7）は、復元径12.8cm、器高3.2cmを測る。内外面共に回転ナデを施す。

自然流路跡 SD87 先端部を欠損した扁平な鉄釘（第7図-11）である。残存長4.8cm、頭部幅1.2cm、頭部厚0.3cmを測る。SD87からは他に、丸瓦片なども出土している。



第9図 遺物実測図

IV. まとめ

1 遺構の変遷

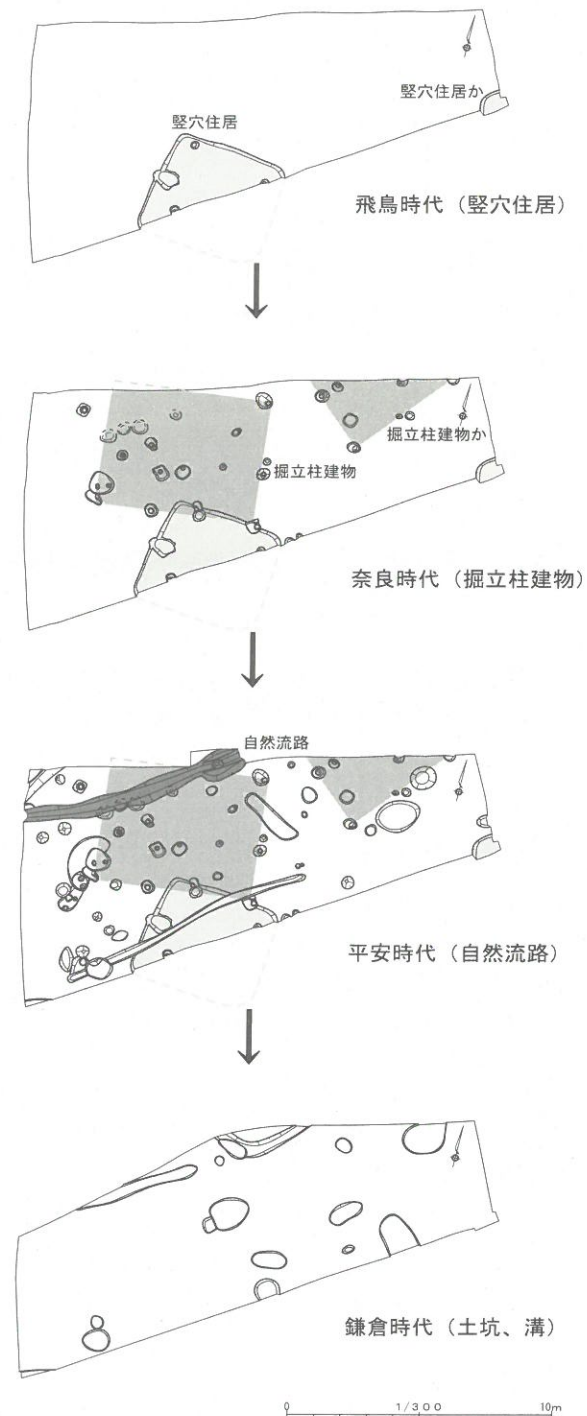
本調査地における遺構の変遷について年代順に述べる。まず、飛鳥時代の後半より、この場所に集落が営まれ、竪穴住居が築かれる。年代的には竪穴住居跡の出土土器より、7世紀第4四半期頃のことと考えられる。

その後、飛鳥時代の竪穴住居は埋められて、掘立柱建物が造られる。建物の年代は、竪穴住居より新しく、平安時代の溝より古いことから、奈良時代頃ということはわかるものの、詳細な年代については不明である。

掘立柱建物の廃絶後は、その上を自然流路が東から西へと横切っている。流路の底からは、調査地北の広野廃寺で使われたと見られる瓦が出土している。寺が奈良時代後半に廃絶したことから、この溝は平安時代頃のものと考えられる。

鎌倉時代には明瞭な遺構は認められず、土坑や溝があるのみである。角の丸い瓦器等以外、遺物も少ない。この頃の当該地では、生活痕跡が極めて希薄となる。また、鎌倉時代の遺物を含む流土層の上から洪水堆積土層が見られる。

上記の変遷を総合すると、調査地で人々が生活していたのは奈良時代頃までである。平安時代頃以降は、別の場所に集落を移した可能性がある。平成2年度の調査で検出した掘立柱建物が造られた場所は、その候補と考えられる。



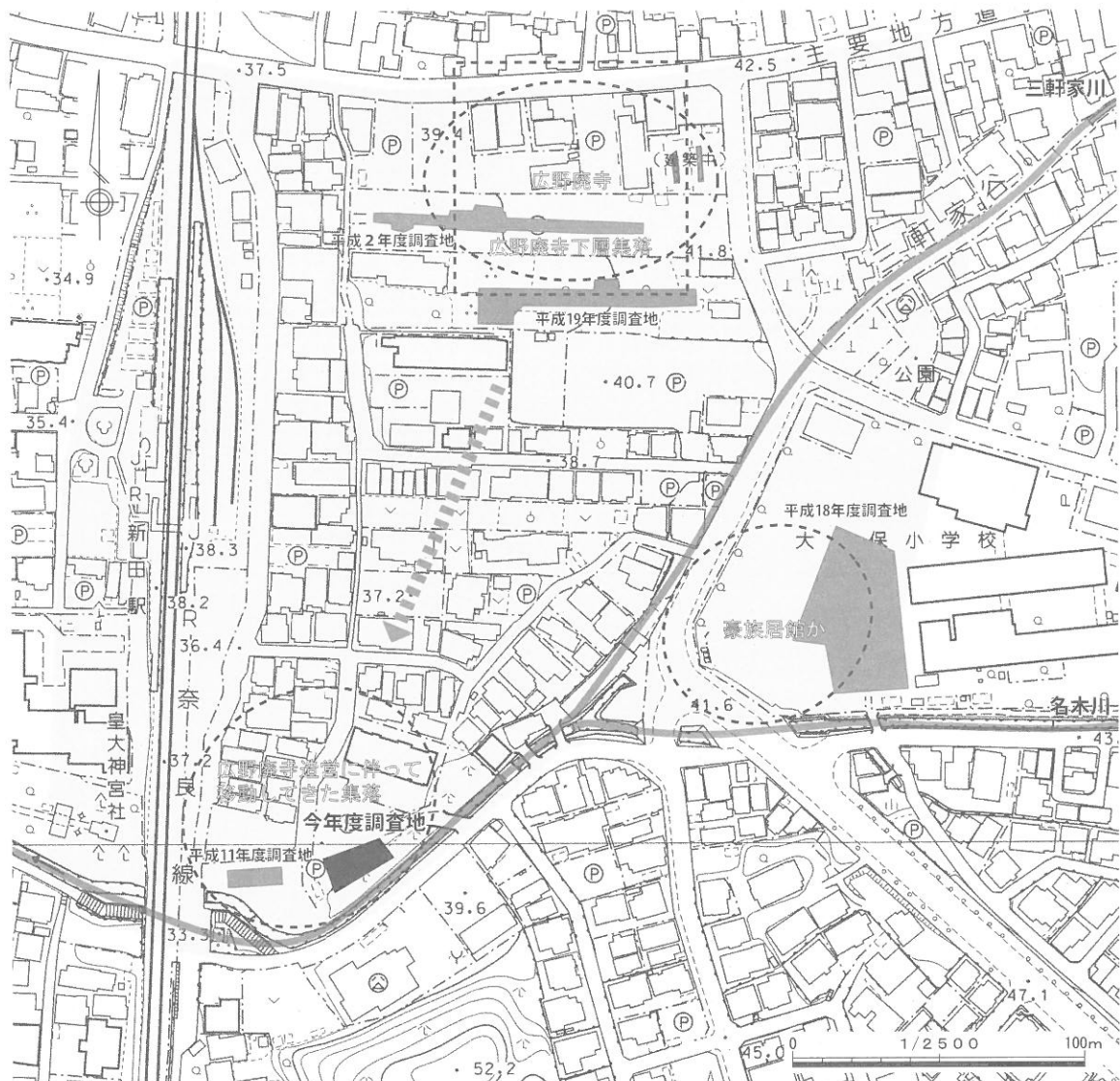
第10図 遺構の変遷

IV. まとめ

2 集落の移動

最後に、本調査地で飛鳥時代後半頃より集落を造り始めた人々がどこから来たのかを考える。当該地北方にある広野廃寺下層の集落では、7世紀第3四半期の土器が出土している。そのことから、広野廃寺造営開始直前まで人々が生活していたことは明らかである。ただし、7世紀第4四半期の寺院造営開始時に、人々がどこへ移動したのかは不明であった。

本調査で検出した集落は、竪穴住居跡の形状や出土した土器の年代、地理的位置関係から、7世紀第4四半期に廃絶した広野廃寺下層集落との関係が考えられる。しかし、両者を合わせた場合に規模が広範過ぎること、出土した土器に明瞭な時期差が認められること、下層集落南の平成19年度調査地では集落の痕跡が検出されていないことから、本調査地の集落と広野廃寺下層集落は元々同じ領域に含まれたものではなく、別個造営されたものと考えられる。その場合、本調査地で検出した集落は、広野廃寺造営によって北から移転してきた集落の可能性がある。

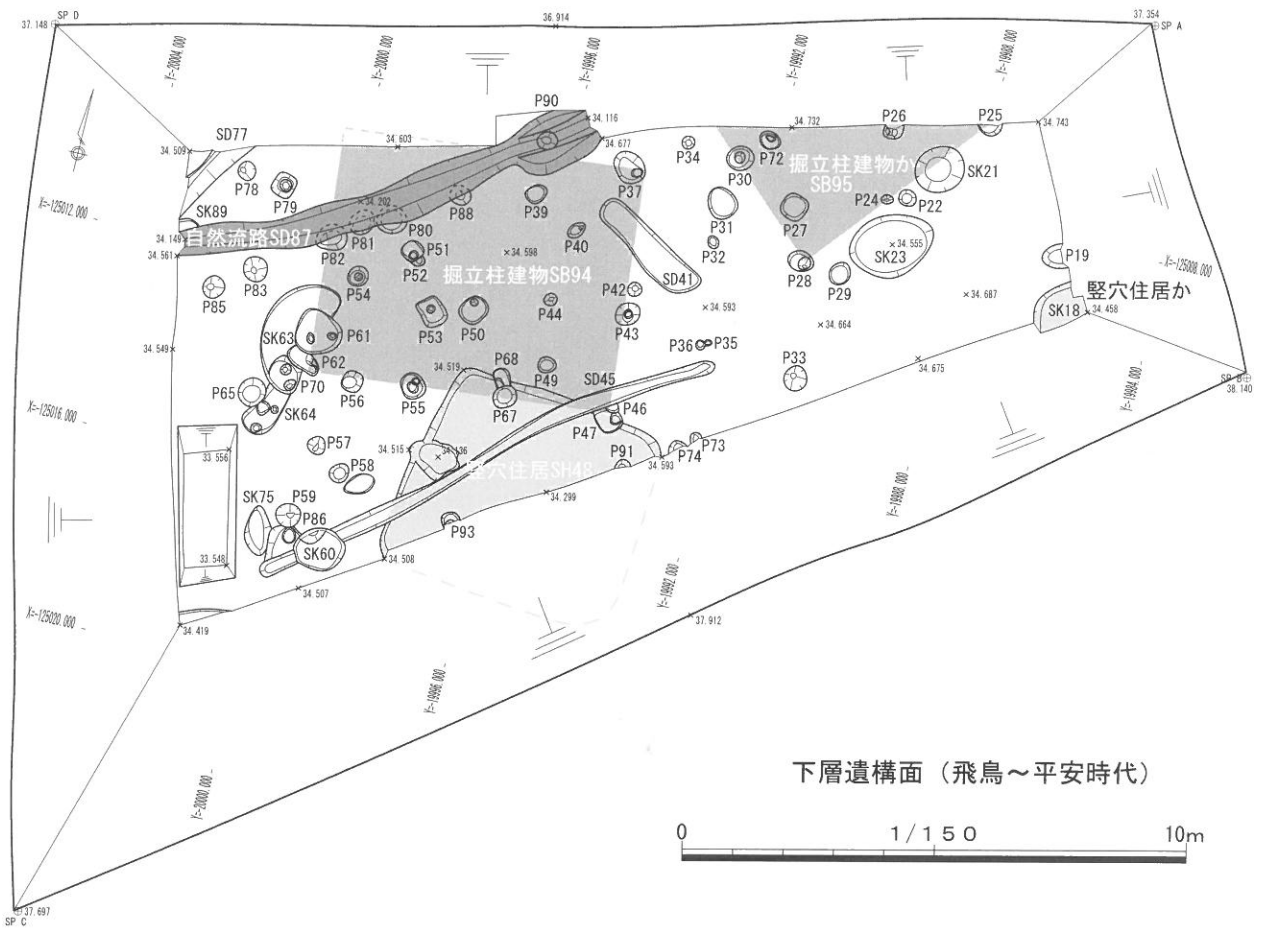
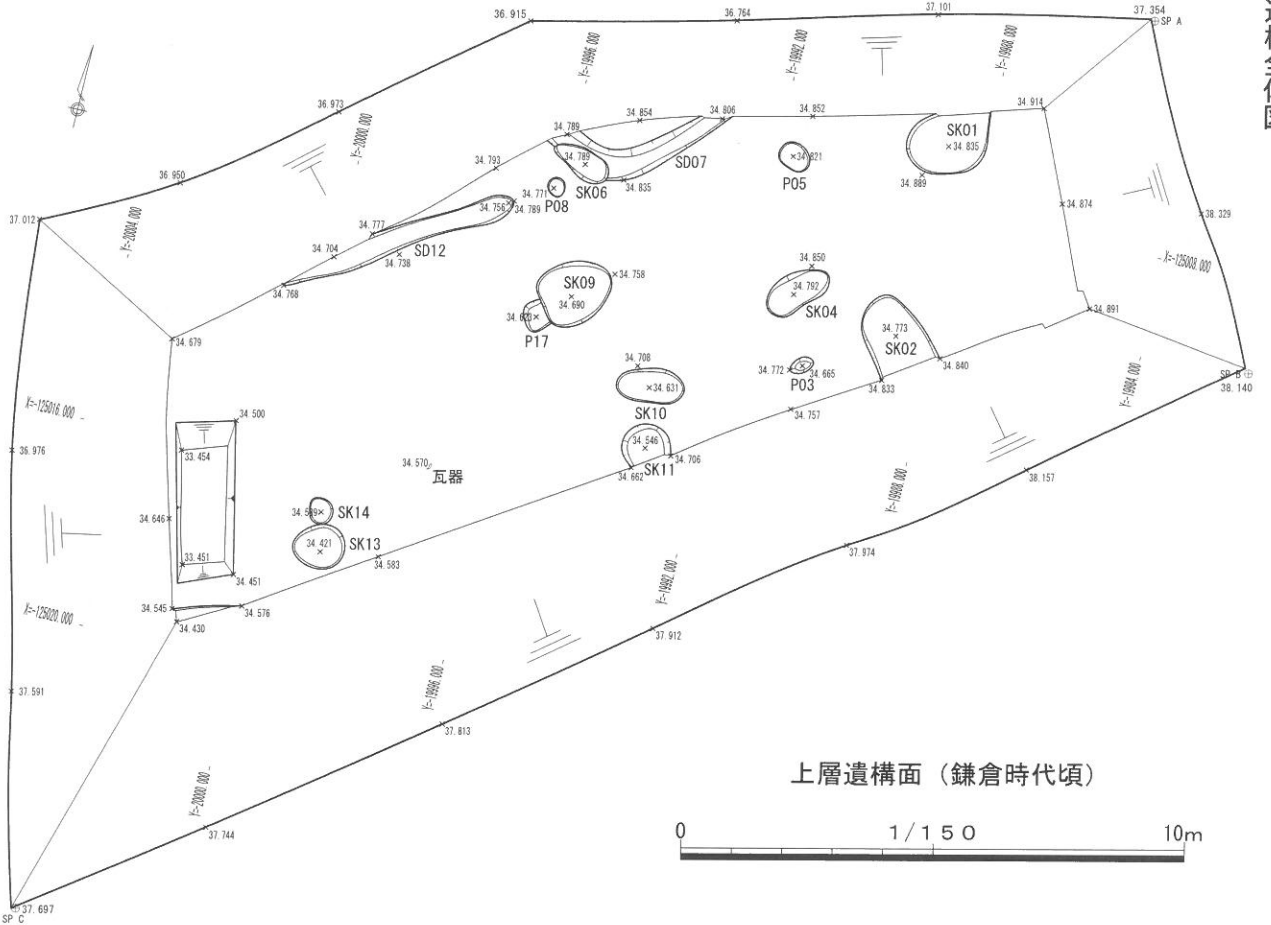


第11図 集落の移動

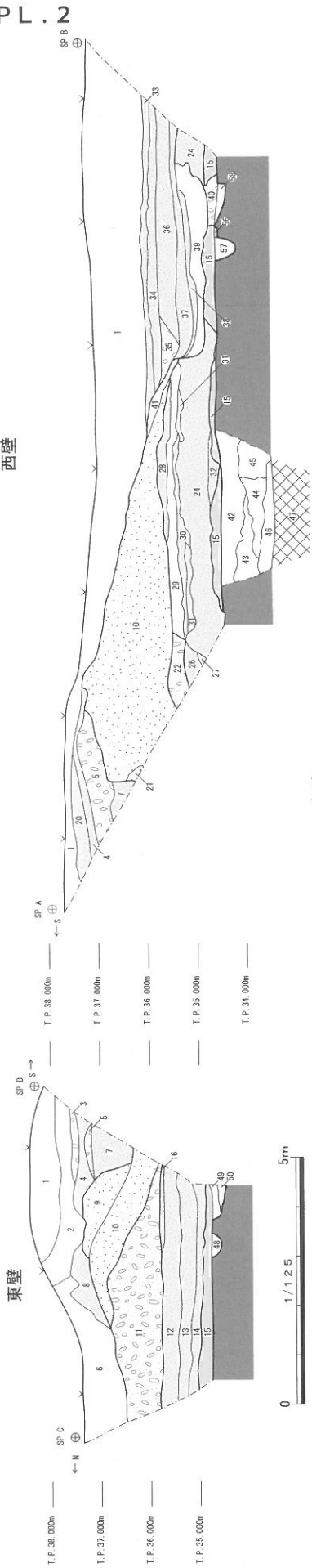
図面図版

遺構全体図…P L. 1

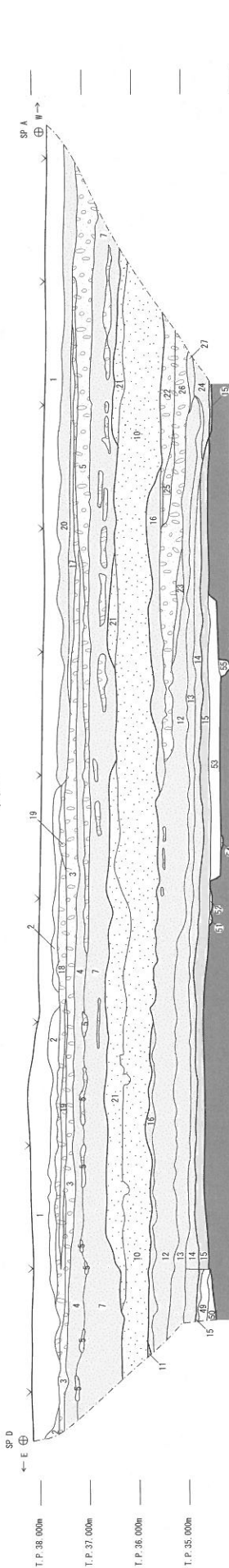
土層断面図…P L. 2



西壁



南壁

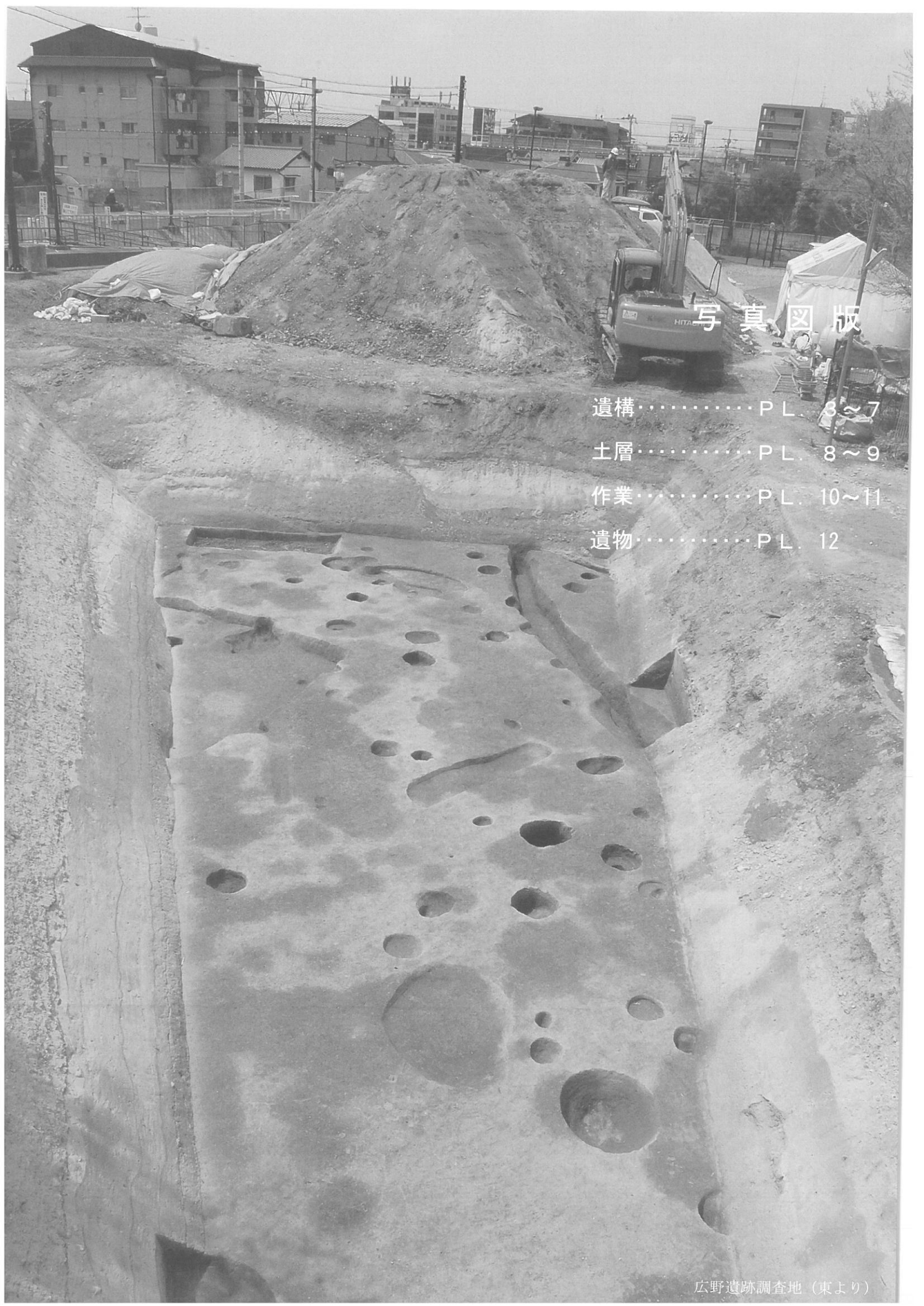


凡例

	洪水堆積土
	河流堆積土
	盛土
	流土
	地山

- | | | | | |
|----|-------|----------------|------------------|-----|
| 1 | 素土 | 明黄褐色 (2.5Y7/6) | 径0.1~1cm程の礫を5%含む | 細粒砂 |
| 2 | 洪水堆積土 | 黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 3 | 河流堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/6) | 径0.1~1cm程の礫を1%含む | 細粒砂 |
| 4 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 5 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 6 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 7 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 8 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 9 | 盛土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 10 | 盛土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 11 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 12 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 13 | 河流堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 14 | 河流堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 15 | 流土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 16 | 河流堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 17 | 河流堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 18 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 19 | 盛土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 20 | 盛土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 21 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 22 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 23 | 河流堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 24 | 河流堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 25 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 26 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 27 | 河流堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 28 | 河流堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 29 | 流土 | 明黄褐色 (2.5Y8/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |

- | | | | | |
|----|--------|----------------|-------------------|-----|
| 30 | 河流堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y7/6) | 径0.5~1cm程の礫を1%含む | 中粒砂 |
| 31 | 河流堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y6/4) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 32 | 河流堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y6/8) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 33 | 河流堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y6/6) | 径1~3cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 34 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y7/4) | 径1~3cm程の礫を20%含む | 粗粒砂 |
| 35 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y7/6) | 径0.5~3cm程の礫を25%含む | 粗粒砂 |
| 36 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y6/3) | 径0.1~1cm程の礫を10%含む | 粗粒砂 |
| 37 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y5/3) | 径0.1~1cm程の礫を1%含む | 粗粒砂 |
| 38 | 洪水堆積土 | 明黄褐色 (2.5Y5/3) | 径0.1~1cm程の礫を1%含む | 粗粒砂 |
| 39 | 素土 | 明黄褐色 (2.5Y7/3) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 40 | 素土 | 明黄褐色 (2.5Y4/6) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 41 | 素土 | 明黄褐色 (2.5Y4/2) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 42 | 素土 | 明黄褐色 (2.5Y4/2) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 43 | 素土 | 明黄褐色 (2.5Y5/3) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 44 | 素土 | 明黄褐色 (2.5Y5/3) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 45 | 素土 | 明黄褐色 (2.5Y5/3) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 46 | 素土 | 明黄褐色 (2.5Y5/3) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 47 | 地山 | 明黄褐色 (2.5Y6/2) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 48 | P19埋土 | 明黄褐色 (2.5Y6/2) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 49 | SKI埋土 | 明黄褐色 (2.5Y6/2) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 50 | P74埋土 | 明黄褐色 (2.5Y6/2) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 51 | P18埋土 | 明黄褐色 (2.5Y6/2) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 52 | P43埋土 | 明黄褐色 (2.5Y6/2) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 53 | SH48埋土 | 明黄褐色 (2.5Y6/2) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 54 | P91埋土 | 明黄褐色 (2.5Y6/2) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 55 | P93埋土 | 明黄褐色 (2.5Y6/2) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 56 | S08埋土 | 明黄褐色 (2.5Y6/2) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 57 | SK89埋土 | 明黄褐色 (2.5Y6/2) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |
| 58 | S077埋土 | 明黄褐色 (2.5Y6/2) | 径1~5cm程の礫を5%含む | 粗粒砂 |



写真図版

- 遺構……………PL. 8~7
- 土層……………PL. 8~9
- 作業……………PL. 10~11
- 遺物……………PL. 12



上層遺構完掘状況（西より）



下層遺構完掘状況（西より）



竪穴住居跡 SH48 掘削途中（西より）



竪穴住居跡 SH48 完掘状況（西より）



須恵器（西より）
左にカマドの上面が露出



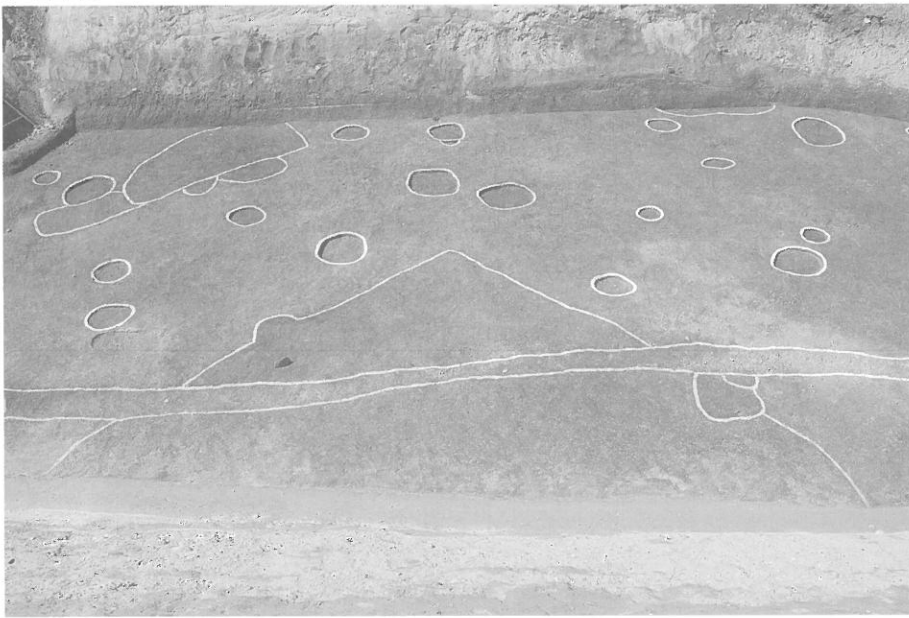
土師器（南より）
カマドの前方



土器・炭灰溜り（西より）
カマドの西方

PL.6

掘立柱建物跡SB94と自然流路跡SD87



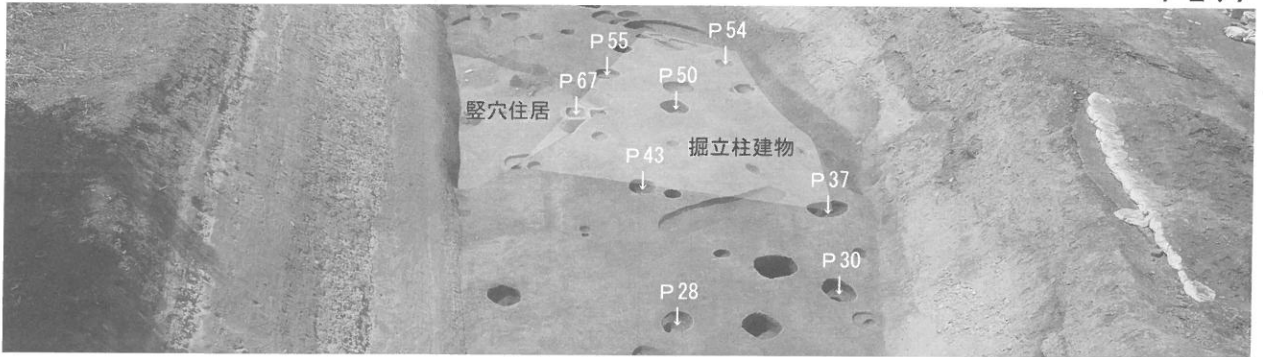
掘立柱建物跡SB94
検出状況(南より)



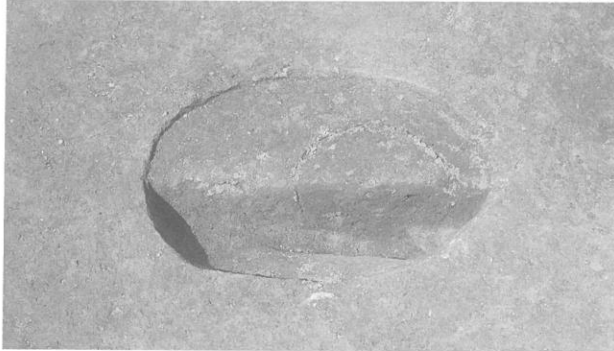
掘立柱建物跡SB94
完掘状況(南より)



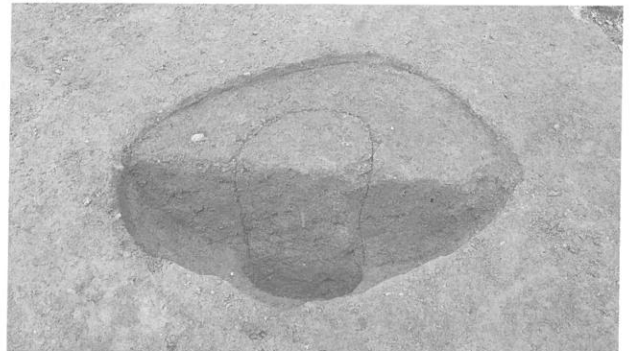
自然流路跡SD87
掘削途中(南西より)



柱穴の位置 (東より)



柱穴P 28 断面 (南より)



柱穴P 30 断面 (南より)



柱穴P 37 断面 (南より)



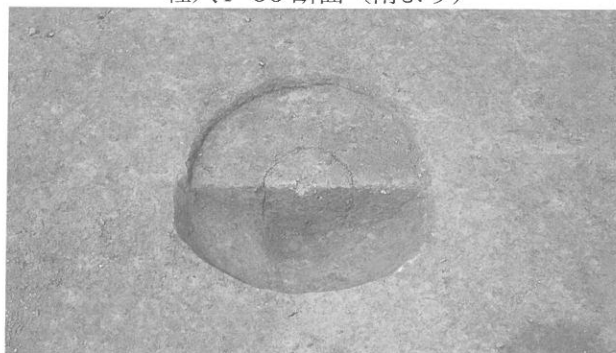
柱穴P 43 断面 (南より)



柱穴P 50 断面 (南より)



柱穴P 54 断面 (南より)



柱穴P 55 断面 (南より)



柱穴P 67 断面 (南より)

PL. 8

東壁・西壁土層断面



東壁土層断面



西壁土層断面



西壁下断ち割り断面



南壁土層断面（東側）



南壁土層断面（中間）



南壁土層断面（西側）



調査前現地（北東より）



重機掘削（北東より）



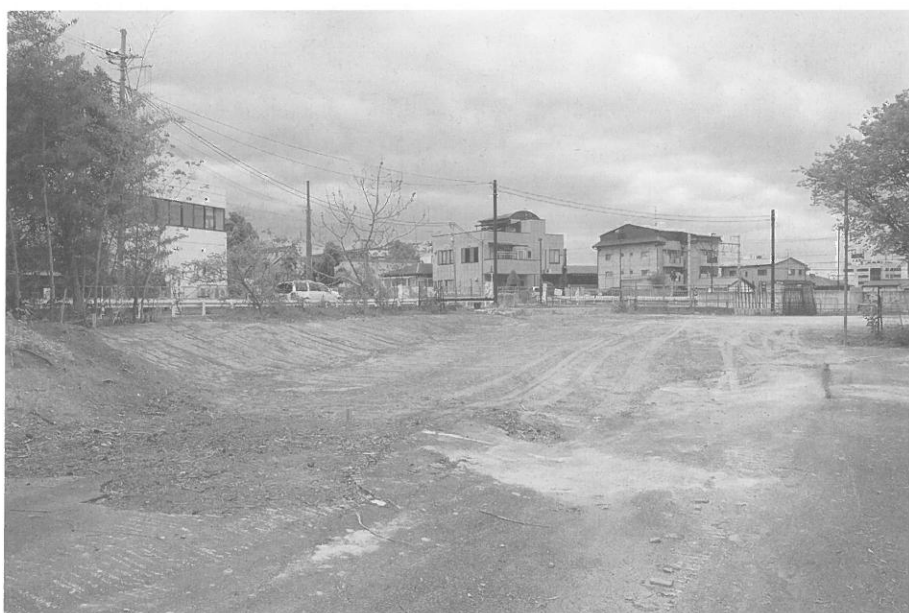
遺構検出（北西より）



遺構掘削（北西より）



記者発表（東より）



調査後現地（東より）

出土遺物

P L .12



土師器 坏 (SH48)

1



須恵器 蓋 (SH48)

5



須恵器 坏 (15層)

8



土師器 皿 (SH48)

2



須恵器 蓋 (SH48)

6



須恵器 高坏 (SH48)

9



土師器 鍋 (SH48)

3



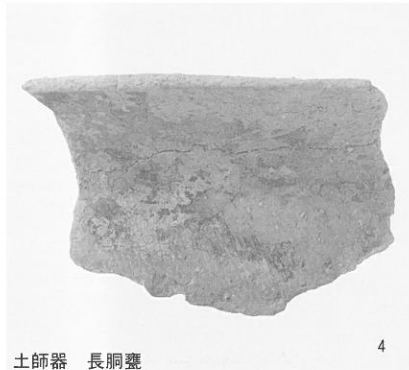
須恵器 蓋 (15層)

7



須恵器 高坏 (SH48)

10



土師器 長胴甕

4



須恵器 甕 (SH48)

11



丸瓦 (SD87)

12



須恵器 甕 (15層上面)

13



瓦器 椀 (15層上面)

14



弥生土器 甕 (15層)

15



焼土塊 (SH48)

16



鉄器 鋏先か (SD87)

17



鉄器 釘 (SD87)

18

報告書抄録

ふりがな	ひろのいせきはくつちょうさほうこくしょ
書名	広野遺跡発掘調査報告書
副書名	
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第76集
編著者名	横田真吾
編集機関	宇治市都市整備部 歴史まちづくり推進課
所在地	〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33
発行者	宇治市教育委員会
所在地	〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33
発行年月日	西暦2010年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	北緯	東経	期間	面積	調査 原因
広野遺跡	広野町 東裏	26204	126	34度 52分 23秒	135度 46分 52秒	20090323 ～ 20090423	294㎡	名木川 改修
所収遺跡名	種別	主要 時代	主要遺構		主要遺物		特記事項	
広野遺跡	集落	飛鳥	竪穴住居、掘立柱建物		土師器、須恵器、瓦器 丸瓦、鉄器		広野廃寺造営に際し、 北から移動した集落	
所収遺跡名	成果要約							
広野遺跡	調査で検出した集落は、出土した土器の年代観から、飛鳥時代後半の広野廃寺造営前に存在した集落が当該地へ移動したもので、奈良時代には竪穴住居から掘立柱建物へと住居が変化した。掘立柱建物を削る溝より、広野廃寺で使われたとみられる丸瓦片が出土していることから、この建物は奈良時代後半以降に廃絶したと考えられる。							

広野遺跡発掘調査報告書

宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第76集

発行日 2010年3月31日

発行者 宇治市教育委員会

編集 〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33番地
宇治市都市整備部 歴史まちづくり推進課

〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33番地

T E L 0774 - 21 - 1602

F A X 0774 - 21 - 0400

e-mail rekimachi@city.uji.kyoto.jp

印刷 ヤマシロ印刷

〒611-0014 京都府宇治市明星町2-6-97

